

## 生命表の概況

生命表は、死亡状況が作成基礎年次以後不変であると仮定し、一定期間におけるある人口集団についての死亡秩序を、死亡率、生存数、定常人口、平均余命等の関数で示したものである。

各関数の意味は次のとおりである。

**死亡率** ( $nq_x$ ) : ちょうど  $x$  歳に達したものが  $x + n$  歳に達しないで死亡する確率を、 $x$  歳以上  $x + n$  歳未満における死亡率といい  $nq_x$  で表す。

**生存数** ( $l_x$ ) : 10万人の出生者が、上記の死亡率にしたがって死亡減少していくと考えた場合に、 $x$  歳まで生き残ると期待される者の数を  $x$  歳における生存数という。

**死亡数** ( $nd_x$ ) :  $x$  歳における生存数  $l_x$  人のうち、 $x + n$  歳に達しないで死亡すると期待される者の数を  $x$  歳以上  $x + n$  歳未満における死亡数といい  $nd_x$  で表す。

**定常人口** : 毎年10万人の出生が年間を通じてまんべんなくあったとして、( $nL_x$ 、 $T_x$ ) これらの者が上記の死亡率にしたがって死亡すると仮定すると、究極において一定の人口集団が得られる。この集団の  $x$  歳以上  $x + n$  歳未満の人口を  $x$  歳から  $x + n$  歳における定常人口といい、 $nL_x$  で表す。また、 $T_x$  は、 $x$  歳の生存数  $l_x$  人について、これらの各々が  $x$  歳以降死亡に至るまでの生存数の和、または、上記の人口集団における  $x$  歳以上の人口である。

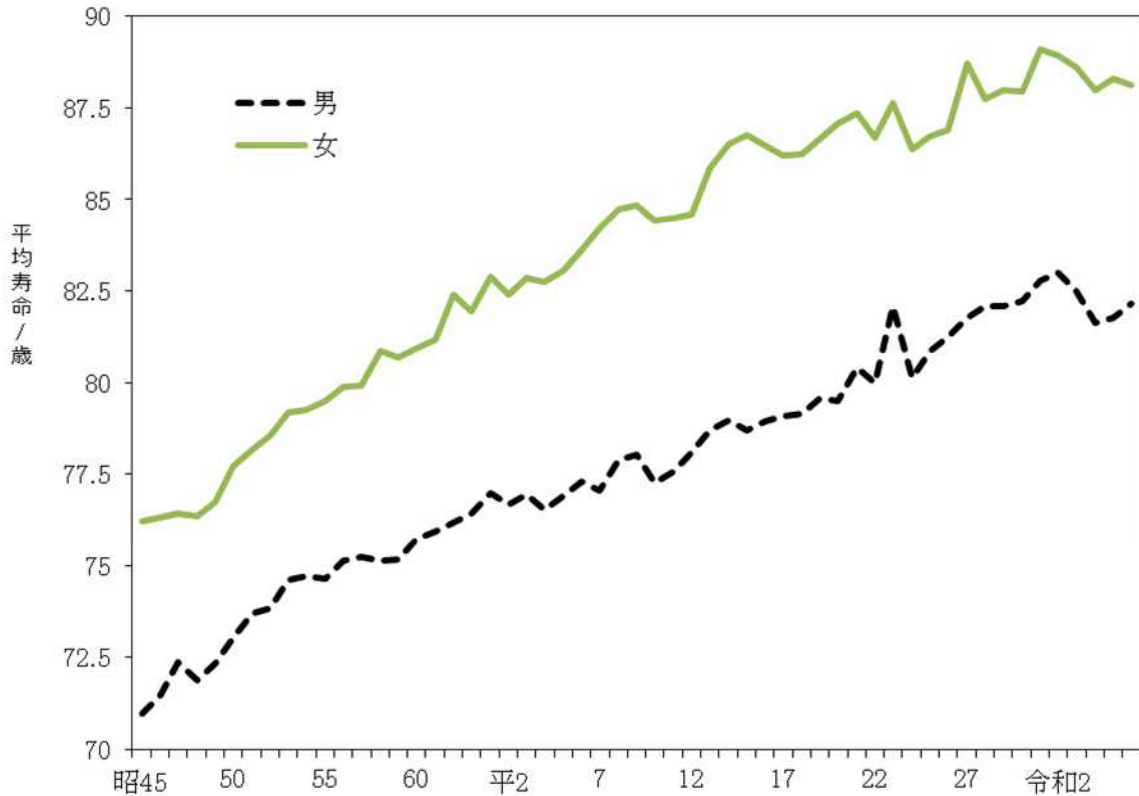
**平均余命** :  $x$  歳の生存数  $l_x$  について、これらの者の  $x$  歳以降の生存年数の平均を平均余命といい、0歳の平均余命を特に平均寿命と呼んでいる。

### (1) 京都市の平均寿命

令和6年の京都市の平均寿命（0歳の平均余命）は男82.14歳、女88.13歳となっており、昨年と比べると男の平均寿命は0.39歳長くなり、女の平均寿命は0.16歳短くなっている。男女の平均寿命の格差は5.99歳で、昨年より0.56歳小さくなっている。

平均寿命の年次推移をみると、過去10年間に男で0.89歳、女で1.24歳長くなっており、過去20年間では男で3.21歳、女で1.66歳長くなっている（図1）。

図1 平均寿命の年次推移



(2) 特定年齢階級までの生存数

令和6年の京都市の簡易生命表では、65歳の年齢階級での生存数は男90,667人で女95,037人であるが、これは10万人出生したうちで、男で90.7%、女で95.0%が65歳の年齢階級まで生存することを示している。同様に男の64.8%、女の82.8%が80歳まで生存することとなっている。

年次推移では、40歳まで生存する者の割合と比べて、80歳まで生存する者の割合の伸びが大きく、昭和50年と比較してみると、男が約1.8倍、女が約1.5倍に増加、昭和40年では男で約2.7倍、女で約2.0倍に増加している(表1)。

表1 特定年齢階級まで生存する者の割合

(%)

年齢階級	男			女		
	昭和40	昭和50	令和6	昭和40	昭和50	令和6
40歳	94.0	96.1	98.6	95.8	97.3	98.8
65	72.3	80.6	90.7	81.6	87.1	95.0
80	24.5	36.9	66.3	41.7	53.4	82.4